近代日本体育の形成における幕末フランス軍事顧問団の影

大久保英哲

Hideaki Okubo: The trace of French assistance military advisory at the end of Edo Period in the formulation of Japanese modern physical education system. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci., 54: 1-14, June, 2009.

Abstract : The French military assistance advisory, which visited Japan in 1867, placed emphasis on “development of the body” as basic training for soldiers, and actually gave instructions for this purpose. The textbook used for this instruction had never been identified, but as a result of reviewing *Mokuba no Sho* (“the book of the wooden horse”, published around 1867) written by Hayashi Shojuro (1824-1896), their interpreter, it was found that this is a translation of the part describing wooden horse exercises in the French manual of army gymnastic exercises, “*Instruction pour l’enseignement de la gymnastique*”, which was the gymnastics textbook brought to Japan by the French military delegation. In addition to the 200-page text, a total of 18 pages of figures illustrating 33 pieces of gymnastic apparatus and exercises using them, and a plan of an outdoor apparatus gymnastics field with apparatus for 200 to 300 people are attached.

The “*Instruction*” continued to be studied mainly by the army. On the other hand, the Ministry of Education established the *taiso denshu jo* (Physical Training Institute) in 1878, and invited the American medical doctor, George Adams Leland (1850-1924), to conduct research there. Through his study, the Ministry of Education selected light gymnastics as the most suitable method for the Japanese school physical education system, and it became popular nationwide around 1885 as alumni of the Physical Training Institute spread throughout Japan.

In 1883, however, the Ministry of Education instructed the implementation of *hohei soren* (infantry training) and *heishiki taiso* (military exercises) for secondary schools in addition to the normal gymnastics. This marks the introduction of the French gymnastics, employed by the army, into school physical education.

As we can see, the French military assistance advisory’s visit to Japan at the end of the Edo Period and the “*Instruction*” they brought with them, were quickly followed by the establishment of the Japanese army gymnastics system. Along with the implementation of infantry training and military exercises around 1885, it also left clear traces in the formulation of the modern Japanese physical education system.

Key words : Mokubano-sho, Instruction, French gymnastic, Taiso-Kyohan

キーワード : 木馬之書, アンストリクシオン, フランス体育, 体操教範

1. フランス軍事顧問団の来日

わが国にフランス体育がもたらされたのは、幕府が招請したフランス軍事顧問団の来日（慶応2（1867）年）に端を発する。この間の経緯について篠原宏『陸軍創設史』（1983）に依拠しながらその概要を見ていこう。

フランス軍事顧問団の来日には幕末における幕

府と薩長との軍事的対立が背景にあった。薩摩長州両藩の攘夷から開国への転換、薩長連合の形成、幕府権力の衰えと薩長との対立は必然的に両陣営を兵力の近代化と外国勢力との接近に向かわせた。そして結果的に幕府は軍制改革の範をフランスにとった。それは第二次長州征伐に備え、イギリスに接近しながら近代軍制改革に取り組んでいた薩摩長州に対抗上必要な措置でもあった。

フランス軍事顧問団は、シャノワン（Charls

Chanoine, 1835–1915) を団長とする 15 名（後に増派されて最終的に 19 名）であった。内訳は士官 6 名、下士官 12 名、退役下士官 1 名である。これが第一次フランス軍事顧問団と呼ばれるミッションである。（後明治 5（1872）年にマルクリー（Charles Marquerie, 1824–1894）ら 16 名の軍事顧問団が来日する。これらは第二次フランス軍事顧問団と呼ばれる。）第一次フランス軍事顧問団は 1866 年 11 月 19 日（慶応 2 年 10 月 13 日）マルセーユを出発、アレキサンドリアスエズ間を列車で、スエズから船に乗り、およそ 2 ヶ月の行程を経て、1867 年 1 月 13 日（慶応 2 年 12 月 8 日）横浜に到着した。翌日、シャノワン一行は幕府が慶応元年末から設営を行っていた兵営「太田村陣屋」に入り、歩兵・砲兵・騎兵、すなわち三兵の訓練に入った。いわゆる「仏式伝習」と呼ばれる軍事訓練である（篠原, 1983, pp. 128–129）。

2. 仏式伝習と基礎体力の欠如

これに参加した田島金太郎は次のように語っている。

フランスの教師もいよいよ着きまして、それから当時江戸にあります歩兵隊その他を選抜して横浜へ模範隊をこしらえるために、およそ其の当時歩兵の一大隊の人数、それから砲兵、騎兵（工兵はまだその当時ありませぬで少し遅れておりました。）それだけを横浜に出発させて、そのころ太田村という所へ当時陣屋と称えましたが、兵営をつくって、そこへ皆入れて、外国教師もその陣屋内の、今日申しますと実に粗末な家と思いますが、極めて不完全な小屋掛同然な所に教師を入れて置いて、そこで実地の練習をはじめた。（篠原, 1983, p. 132）。

訓練をしている兵士の服装はというと、今から見れば、きわめて不恰好な不思議なもので、ズボンといえば、支那婦人の穿いている袴のようなダンプクロで、上には陣羽織のようなものを着ていた。帽子は蕨山笠で、腰には大

小を着していたのです。何と奇妙な風でしょう。（「南太田町、塩谷幸三郎翁談」「横浜どんたく」（篠原, 1983, p. 133））

さてこのように開始された仏式伝習のなかで、フランス人たちが認識したのは日本人兵士たちの基礎体力の欠如であった。シャノワンらは将軍徳川慶喜や幕府陸軍総裁松平縫殿頭に到着後 2 カ月たった頃からかなりの意見書を提出する。その中で最も早い時期に提出された「シャノワン建白書」（慶応 3 年 4 月）では次のように兵士の基礎訓練の必要性を述べている。「シャノアン建白和解」の「訓練・第二十二」（勝, 1889, p. 327）を見てみよう。

日本の兵隊に練体法を教ゆる事要用なるべし。自然身体の労役を好まざる人々をして、屈曲自在、動作活発ならしむるためなり。（現在太田村屯所に於て少しくこれを行なえり。号令を掛けて、或いは頭を左右に振らせ、或いは上下に振らせ、或いは手を輪転せしめ、或いは輪転しながら走らしめ、或いは背行して走り、或いは片足にて走り、或いは手を連ねて同走し、或いは膝行し、或いは兩人互に両手を執りて引合い、或いは高さより飛下せしむる等、種々の法あり。騎兵も馬上にて種々の体勢を為す。使臣の内にその書を所持し、絵図等甚だ詳かなりと聞けり。某未だその書を目観せず、故にその詳を尽す能わず）

すなわち本来戦闘集団であるはずの武士たちは徳川 250 年の泰平の中で、「自然身体の労役を好ま」ない人々と化し、「練体法」すなわち基礎的な体力や運動能力養成が必要な段階にあること、またその「練体法」のためにフランス人一行が馬上運動等各種の絵図を含んだ書物を持参していることを述べている。また、馬匹やその取扱ひ方に問題があって騎兵訓練が遅延しており、日本においては騎兵隊の創設は二次的ではないかとの見通しを次のように示していた。

騎兵隊第三十二

騎兵の教導を太田村に於て始めたり。この模様にては江戸と同様に上達し難し。然かのみならず、僅かのエスカドロン（騎兵の一大隊）ならでは編列すべからざる故に、これより速かに抄取るべき仕方にて、且つ広き地を撰びて為すを要す。馬の畜養及び取扱いしばしば闕事あり。騎兵を用ゆる事、日本の如き国に於ては、第二等の要件なり。然れども、その数少なきならば精良なるを要す。騎兵の教導は、歩兵隊の教導より遅延なり。もし三兵、大抵同時に教導済すを欲せば、騎兵は勉励を加えざるべからず。（勝, 1889, pp. 328-329）

このように仏式伝習は、近代軍を編成する上で基礎となる日本人兵士の基礎体力不足、近代騎兵部隊を編成する前提としての馬匹畜養や取扱法の問題を次々と明らかにしたのである。この2つの問題は陸海軍の問題にとどまらず、後に近代日本が教育における「体育」政策、産業における「富国強馬」政策（武市, 1999）として、国家的大事業として総力をあげて取り組む課題となったのである。

3. 仏式伝習における「練体法」の内容

(1) 田辺良輔『新兵体術教練』（明治元（1868）年）

さて、この仏式伝習における「練体法」の内容を伝える記録として従来2つが知られていた。1つは田辺良輔『新兵体術教練』（明治元（1868）年）である。大場（1982）によれば、田辺は文政8（1825）年11月25日、下総国東葛飾郡国分村農民山崎善佐衛門二男として生まれた。のち、江戸に出て蘭学、砲術を修行、次いで田辺仁左衛門の養嗣子となり、元治元（1864）年頃、幕府講武所奉行松平乗厚（仲）の永田町邸内に設けられた砲術塾の学監として活躍した。『仏蘭西令言図解』（生兵号令・小隊号令図解・撤兵之部）（慶応3（1867）年）、『仏蘭西輕歩兵程式』（明治2（1869）年）などの訳書がある。『新兵体術教練』は42歳時の著である。

著述の動機について、田辺（1868）は「序」の

中で次のように述べる。

抑此書たるや佛国陸軍の士官数人を召して伝習有しとき直に業を教うるに諠（^{ママ}（^{ママ}）^{わざか}）に令のみを記したるものを授くこれを得て著述するものなれば彼の原書を見るときは定て相違すること有ん 左ありながらも軍卒を操練する和蘭英佛の教則を読み普く教場ありといへども只此体術の書と共に伝はらざりしは意憾といふべし 此体術の備はる兵は身体強壯にして駈け引き自在を得 飛走するも運動の業を誤らず呼吸を苦めずして長途に疲労することなきは是らの体術に有といふべし

つまり、「体術」を習得した兵士たちは「身体強壯」となり、「駈け引き自在」、飛走の時も「運動の業を誤らず」、「呼吸を苦めずして長途に疲労すること」もなく、新兵養成上大きな効果がある。また各地に操練の教場もできて和蘭英仏の書物も読まれているが、遺憾ながら「体術の書」はこれまで全く導入されていない。そのために、仏式伝習の際用いられた「和訳体操号令詞」を参考に、『新兵体術教練』を著したというのである。ただし、伝習を実見したり経験しただけで直接原書を見ておらず、「和訳体操号令詞」のみに依拠しているために、フランス人たちが持参した原書とは相当の懸隔があるかもしれないとの懸念を表明しつつ、敢えて出版に踏み切った経緯を述べている。

内容は「生兵練法」と称する徒手的な体操のほか、「高飛の法」「手の届く場へ登る法」「ブラリンコする法」「棹飛びの法」「馬上飛び乗りの法」「臂の力を益す法」などの器械を用いた体操法が示されている。また要する器械の絵図として棚、階段、平行木、梁木、高飛び器械、木馬等が図示されている。

(2) 弘前藩『仏式伝習口説節』

次に、この仏式伝習に参加した各藩の武士の中には自藩に洋式操練化を図り、その基礎訓練として「シャノワン建白書」に言う「練体法」、すなわち体育法を課した記録が見られる藩もある。代表

的な記録に弘前藩の『仏式伝習口説節』（推定明治3（1870）年）がある（館山, 1934）。これは弘前藩が明治3（1870）年7月3日、江戸から吉野芳次郎を招聘して、弘前藩軍事局仏式調練の子弟百名を養成した際の藩士の様子を伝えるものである。体を逆さにぶら下げる「鳥のせめ」（吊り棒もしくはトラペ（trapèze：体操用ブランコ）か：筆者）、「木馬」、歩行や駆け足を伴った執銃教練の過酷さ、「平行木」での肩の付け根の痛さなど、西洋伝来の器械運動を含んだ体操や駆け足などの兵士の基礎的身体訓練に初めて接して悪戦苦闘する日本人受講者の様子を伝える貴重な記録となっている。

(3) 林正十郎『木馬之書』

さて仏式伝習の基礎訓練を知る上で、金沢市立玉川図書館近世資料室加越能文庫「渡辺庸旧蔵」文書の騎兵訓練関係資料の中でも、林正十郎『木馬之書』（推定慶応3（1867）年）はとりわけ貴重な資料である（図1参照）（大久保, 1993, 1995, 1997）。

著者林正十郎は、幕末仏学史上著名な人物である。すでに述べたように、シャノワンら第一次フランス軍事顧問団が横浜に到着したのは、慶応2年12月8日のことであるが、林正十郎が「開成所教授職並」と「陸軍所三兵御用兼」に任ぜられたのも、同一日付（小西, 1990）である。なお、「陸軍所三兵御用兼」としてシャノワンたちの通訳に当たったのは、開成所教授入江文郎と新任教授林正十郎の2名であり、「横浜三兵伝習局翻訳」のため「横浜表に差し遣」られることになったのが、慶応3年1月25日であった（江戸城多聞櫓文書, 1866）。つまり、幕府は仏式伝習にあたって、当時の最も優れたフランス語の頭脳を開成所教授の中から派遣したのである。

富田（1988）によれば、この当時の入江文郎と林正十郎のフランス語力がどのようなものであったかを知る貴重な文書が残されている。慶応元（1865）年開成所ドイツ語教授であった市川齋宮の長男文吉が幕命によりロシア留学することになり、当時の開成所教授35人がそれぞれ得意の外国語で書いた送別の文である。その中の入江文郎の文章

図1 『木馬之書』

はフランス語としても内容の点でも卓越しているのに対し、林正十郎のフランス語は、現在の水準からすれば「これが幕府最高の洋学研究機関の教授スタッフの手になるものかと思うほど稚拙なフランス語で書かれてある」という。シャノワン建白書をはじめ、緊急性の高い文書の翻訳や、フランス軍事顧問団と幕府の間の正式文書の翻訳の多くが入江文郎によってなされている^{注1)}のはこうした理由によるものと考えられる。これに対して林正十郎は、入江文郎ほどの語学力はなかったにしても、やはり当時のフランス学の代表的頭脳であった。また既に開成所助教時代に『法郎西軍制・陸軍編』（推定慶応2-3年）を翻訳しており、フランス語と軍事学の知識を兼備した人物として、フランス軍事顧問団の翻訳係としては最適任であったと思われる。緊急性の高い文書や、正式文書の翻訳を担当することの多かった入江文郎と違って、林正十郎は、フランス書をじっくり和訳

する、或いは「大砲に関する技術」（鈴木、1984）等の実戦的操作や知識の伝達に際して通訳に当たるなど、一定の役割分担があったのではないかと推測される。このように考えれば、慶応3年（1867）4月の「シャノワン建白和解」（以下「シャノワン建白書」）の中で *gymnastique* と見られることばが「練体法」と訳されたのは、入江文郎が担当したからであり、林正十郎『木馬之書』の中では「身体運動学」と訳されている理由も氷解する。

『木馬之書』は、大きさは約縦 27.5 cm、横 19.5 cm、12 丁からなる和綴本である。毛筆、楷書体、1 頁に 10 行ずつ、1 行はおおよそ 20 字の縦書きである。表紙には「木馬之書」とあるが、文頭の表題には「木馬書」と「之」を欠いている。

原書は佛国兵学校身体運動学書中の抄訳なり

『木馬之書』の淵源については上記の序文がある。林正十郎はフランス軍制研究者であり、フランス軍制中に兵学校があることは既に『法郎西軍制・陸軍編』の中に指摘している。ただしその中では兵学校で「身体運動学」が教授されていること、及びそのための書物が存在していることまでは言及していない。だが、先述したように、「シャノワン建白書」には一行が「絵図等甚だ詳な」馬上の運動を含んだ体操書と思われる本を持参したことが明記されており、林正十郎は通訳・翻訳係として、この本を真っ先に見る可能性があった。しかも例えば次のような『木馬之書』の運動内容や図を示す表記はこの「シャノワン建白書」記述とみごとに符合する。

第一挙動 馬尾上に身体両脚及び両手を挙げ重ねて後方に退飛するなり。即第一図 abc の如し

『木馬之書』には、このような「馬尾上より飛越る業」12 挙動、「馬の側方より飛越る業」5 挙動、合計 17 種類の木馬運動が、それぞれ運動方法、発声法について記述されているのである。た

だし文中に 15 の図とその中の説明と思われる abc 記号等 36 個が示されているものの、図そのものは省略されている。

4. 原書『アンストリュクション』

(1)『木馬之書』との対応

さて、以上のように『木馬之書』が「仏国兵学校中の身体運動学書中の抄訳」であるとすれば、『木馬之書』の記述内容を当時のフランス陸軍兵学校で採用されていた体育書の内容と比較検討することによって、その原書、すなわちフランス軍事顧問団がわが国に持参した書物の特定が可能である。

1991 年、パリ・フランス軍事博物館所蔵の 1847 年発行初版 *Ministère de la Guerre; Instruction pour l'enseignement de la gymnastique*（字義通りには、（フランス）陸軍省「軍隊のための体操教本」、すなわち体操教範）（以下『アンストリュクション』と略す）のコピーを入手することができた（図 2 参照）。後述するように、この 1847 年版は 1860 年版との異同が問題になるが、明治 7 年『体操教範』（1860 年版『アンストリュクション』に基づく）を 1847 年版と照合すると、少なくとも『体操教範』に記述されている部分（全 3 編のうち 1、2 編の部分、即ち基本の部分）については 1847 年版と図や文も完全に符合しており、1860 年版との大きな相違はない。ただし、さまざまな器械を使用する第 3 編の応用編部分は 13 年の間に技術的な進歩や改良が加えられた可能性も考えられる。そのため本稿の検討は、1847 年版という範囲での限定的な見解としておかなければならない。

『木馬之書』の記述内容と、1847 年『アンストリュクション』167-176 頁の約 10 頁分の「木馬運動」部分の本文説明および付図は、ほとんど正確に対応する。ほとんどというのは、一部に林正十郎が誤訳、あるいは訳を欠落させた箇所、あるいは原文にはない図記号を示すなど若干の差異がみられるからである。

例えば『木馬之書』第 1 条の運動は『アンストリュクション』（1847 年版）では、次のとおりで

図2 『アンストリクション』

ある。

ARTICLE 1er.—VOLTIGE PAR LA CROUPE DU CHEVAL.

1er Exercice.—Enlever le corps et les jambes, les mains sur la croupe et se lancer en arrière (fig. 171, pl. XXIII. a. b.)

すなわち、「第一挙動 馬尾上に身体両脚及び両手を挙げ重ねて後方に退飛するなり。即第一図 abc の如し」という林正十郎の訳はほぼ正確ではあるが、ただし、171 図には a b の 2 記号しかなく、c を加えたのは林正十郎の勘違いであろう。このような若干の間違いや誤訳はほかにもいくつか見られる。誤訳の例をあげよう。「第八挙動 馬首に飛上り、腰を掛けて直に地上に下るなり。即ち第八図 a b c d の如し」。これは、8^e EXERCICE.—Arriver à cheval sur l'encolure sans s'y asseoir et de-

scendre (fig. 178, pl. XXIV. a. b. c. d.) の訳である。ただし、sans s'y asseoir は「腰を掛けて」ではなく「腰を掛けることなく」でなければならない。また訳を欠落させている例としては、「第二条」が「馬の側面より飛越る業」とあるのに対し、「第一条」には運動分類を示すことばは訳されていない。だが、原書には article 1^{er} : voltige par la croupe du cheval とあり、「第一条：馬尾上での運動」としなくてはならなかったことがわかる。また 175–176 頁の「一般的観察」(Observations générales) と題されたおよそ 6 行は『木馬之書』には訳されていない。

このように若干のずれは見られるにしても、『木馬之書』は『アンストリクション』の木馬運動部分と基本的に対応する。この『アンストリクション』以外に幕末から明治初期にかけてわが国に招来された仏体操書としては、Napoléon Dally: *Science du mouvement* (1857) (運動学) (国会図書館)、Napoléon Laisné: *Gymnastique pratique* (1850) (実践的体操) (国会図書館)、や C. Vergnes: *Manuel de Gymnastique* (1872) (体操の手引き) (国会図書館) が代表的なものであるが、これらの書には木馬運動がないか、あるいはあっても『木馬之書』とは記述内容や図が対応せず、原書である可能性はない。

以上の検討から、『木馬之書』の原書が『アンストリクション』であることはほぼ間違いないと思われるが、それが明治 7 年陸軍省『体操教範』の元になっている 1860 年版か、あるいは筆者の見た 1847 年版か、あるいは他の版かは厳密にはわからない。これは今後同書の各版の異同を検討して明らかにしていかなければならない^{注 2), 注 3)}。

(2) 『アンストリクション』の概要

Ministère de la Guerre; *Instruction pour l'enseignement de la gymnastique* (陸軍省；軍隊のための体操教本) は、1846 年 4 月 24 日付で陸軍認可を得、1847 年にパリ陸軍文庫 から初版が出版されている。全文 200 頁の本文のほかに 33 種に及ぶ体操器具・器械図やそれらを用いた各種運動法の図、さらにそれらの器械を配置した 200~300 人対応の屋

表1 『アンストリクション』の構成

titres 編	parties 部	chapitres 門	sections 回	articles 章	titres 編	parties 部	chapitres 門	sections 回	articles 章
第1編 一般規 導則・ 指区分				1 連隊規則 2 教師の人数、選出 3 技の区分、順序 4 教官の職務 5 小隊の編成、事前の準備	第3編 応用演 習	1 溝、 濠、 障碍 越え	1 跳躍	1 器具を用いない	1 両脚跳躍 2 コースに合わせて跳躍 3 武器や装備を携帯して跳躍 4 一般原則
第2編 基本の 演習		1 柔軟演 習	2 棒を使用	同上					
			2 ぶら下 がる運動	1 吊り下げ棒			1 その場での懸垂 2 懸垂から他の位置へ移動 3 運動を伴った懸垂		
				2 水平または傾斜			単一の長索前進		
				3 支柱の 運動			1 水平門木	1 通過 2 懸垂移動 4 水平 3 柱上及び柱下での確保 4 下り	
			2 傾斜門木				同上		
		3 遊動門木	同上						
		4 石・杭 障碍路の 歩行	1 石障碍	同上					
			2 杭障碍	同上					
		5 高足	同上	同上					
		6 水泳台		1 うつ伏せ水泳 2 潜水					
	3 筋力強 化の基本 演習	1 腕の運動	1 懸架器具	1 木の梯子 2 ボルト梯子 3 綱 4 棒					
				2 梁木の運動		1 梁木上の安定と下り 2 梁木上の運動			
2 垂直マ スト			1 マスト懸架器具 2 マスト登り下り	同上 同上					
3 オクト ゴン			1 オクトゴン登り 2 オクトゴン下り 3 競い合い登り						
4 溝付板壁			同上						
5 城壁		1 器具登攀 2 器具なし登攀	同上 同上						
3 行進		1 歩調行進	1 武器を持たない 2 方向転換 3 武器装備携帯 4 重量物運搬 5 坂道の上り下り 6 後ろ向き行進						
			2 速歩	同上					
			3 交差行進	同上					
4 曲乗り (ボル ティエ ージュ)		1 梁木の上							
		2 平行棒上	1 固定平行棒 2 可動平行棒						
		3 トラベ上							
		4 木馬上	1 馬尾上 2 跳び越え						

外器械体操場設計図など合計 18 枚が付されている。

全体の構成は、titre (編), partie (部), chapitre (門), section (回), article (章), exercice (挙動) の順にきわめて体系的に示されるが、最も基本的な指導体系は、第 1 編 指導上の一般規則 (règles générales et division de l'instruction), 第 2 編 基本練習 (exercices élémentaires), 第 3 編 応用練習 (exercices d'application) の 3 編構成として示されている。木馬運動の含まれる第 3 編 応用練習は、第 1 部壕・溝等の障碍越え (franchir des fossés, des ravins, ou traverser des terrains parsemés d'obstacles), 第 2 部登攀 (escalades), 第 3 部行進 (courses), 第 4 部曲乗り (voltige) に分かれている (表 1 参照)。

『アンストリクション』(Ministère de la Guerre (1847)) には、用いられる器具・器械として、I-XI 図が示されている。I 図は、1 ceinture (ベルト), 2 chaîne gymnastique (連鎖状走路), 3 boulet sanglé (紐付き球), 4 barres de fer (投鉄棒), 5 mil modèle (ミル), 6 poignées à lutter (ポアニエ・牽引具), 7 arc-boutant (アルブータン・押し具), 8 corde (索), 9 sautoir (高跳び) 9 種, II 図は、10 tables à sauter (跳躍台), 11 cheval (木馬), 12 chevalet de natation (水泳台) の 3 種, III 図は、13 portique de 1^{ère} classe (1 級用梁木), 14 portique de 2^e classe (2 級用梁木) の 2 種, IV 図は、15 fossé à sauter (濠), 16 poutres inclinées (傾斜円木), 17 poutre oscillante (遊動円木), 18 barres à suspension (吊り下げ棒) の 4 種, V 図は、19 échelle sautoir (棚), 20 échelle sautoir (棚) の 2 種, VI 図は、21 perches amorosiennes (アモロス鉤竿), 22 mâts verticaux (垂直マスト) 2 種, VII 図は 23 octogone (オクトゴン) 1 種, VIII 図は、24 planches à rainures (溝付板壁), 25 barres parallèles mobiles (可動平行棒), 26 barres parallèles fixes (固定平行棒), 27 cercles de pierres et de piquets (石・杭サークル), 28 cercles de pierres (石サークル), 29 échasses (高足), 30 perche à sauter (飛び棒), 31 planche à rétablissement (壁棚) の 8 種, IX 図は、32 tronc d'arbre ou poutre placés sur tasseaux

(登攀用円木), 33 poutre horizontale (水平円木) の 2 種, X 図は、34 poutre horizontale (水平円木), 35 stade (走路) の 2 種の器械が示され、第 XI 図はこれらの器械 (計 35 種) を配置した disposition d'un gymnase régimentaire (器械体操場) の配置図である。

5. 日本におけるフランス体育の展開

さて、幕末以後、わが国において展開されたフランス体育と、『アンストリクション』との関係を検討しよう。

(1) 陸軍『体操教範』(明治 7 (1874) 年)

既に述べたように、明治 7 年陸軍文庫刊行、エシュマン訳述・長坂昭徳筆術『体操教範』序には、その原書が 1860 年の『アンストリクション・プール・ランセイギュマン・ド・ラ・ジムナスチック』であることが明記されている。これが Instruction pour l'enseignement de la gymnastique であり、同書のわが国における実在はこれまで確認されていないものの、確かにわが国にもたらされ、陸軍内で研究されていた事実が確認できる。また『体操教範』は、第 1 編「一般の規則及び教導の区分」、第 2 編「基本演習編」となっているが、これは『アンストリクション』(1847 年版) の第 1 編 指導上の一般規則 (règles générales et division de l'instruction), 第 2 編 基本練習 (exercices élémentaires) と全く共通であり、当該部分が訳述されたものである。図も演技者の顔つきがやや日本人風に模写されたほかは共通である。

(2) 『仏式伝習口説節』『新兵体育教練』との関係

仏式伝習において指導された体育の内容として、『仏式伝習口説節』中には高飛び、トラペ、木馬と推定される運動が描かれている。また仏式伝習を実見して描いたと見られる田辺良輔『新兵体育教練』に出てくる図は木馬、平行棒、梁木、棚と階段の合作、棒、高跳び器械、トラペが見られる。これらは全て 1847 年版『アンストリクション』

図3 「新器械体操之図」

にも見出される。

(3) 陸軍戸山学校器械体操場との関係

木下（1982, pp. 4-5）によれば、「新器械体操之図」（国利画）と題された錦絵がある（図3参照）。明治20年頃の作といわれ、その石垣の形状等から見て陸軍戸山学校を題材としたものという。また、その器械は上左から1「城壁」、2「手摺（平行棒）」、3「跳下台（俗称十二階段）」、4「木馬」、5「跳縄（高跳びのバー）」、6（なぜかこれについては記述がない：大久保）、7「鞆（ブランコ）」、8「梁木」、9「手摺」、10「水平桿（鉄棒）」、11「回旋鐘^{ママ}」、12「柵」、13「板壁^{ママ}」（番号は大久保による）と紹介されている（木下, 1983, p. 7）。

さて図4は、フランスの代表的百科事典『ラルース』の1912年版に掲載されている gymnastique の図である（Larousse, 1912）（図4参照）。ここには図3と酷似する器械が見られる。この『ラ

図4 『ラルース』（1912）の gymnastique 図

ールス』によれば、2「手摺（平行棒）」は Barres parallèles, 4「木馬」は Cheval de bois, 5「跳縄（高跳びのバー）」は Saut à perche, 6はオクトゴン Octogone, 7「鞆（ブランコ）」は Passe-rivière, 8「梁木」は Portique, 9「手摺」は Barres parallèles, 10「水平桿（鉄棒）」は Barre fixe, 11「回旋鐘^{ママ}」は Vindas ou pas de géant, 13「板壁^{ママ}」は Mur-d'assaut に近い。

木下（1983）によれば、陸軍戸山学校は明治6（1873）年6月に現在の新宿区戸山町、当時の尾張徳川下屋敷跡に作られた陸軍最初の将校教育機関である。最初は陸軍兵学校戸山出張所として創設され、翌明治7年独立して陸軍戸山学校とされた。木下（1983）によると

体操器械位置／本校は射撃体操専門たるを以て体操所を設置し完備の該器械位置を定める為め在来の表門を取毀ち器械等を六年十二月廿

図5 『アンストリュクション』体操場配置図

四日設置せり

と明治6(1873)年には器械を完備した体操所を設け、さらに明治7(1874)年7月から「雨覆体操場」の工事が開始され、翌明治8(1875)年4月落成、「ここにおいて一般の体操器械具備」される状態に至ったことが沿革史に記されているという。日本陸軍が当初フランスをモデルに創設されたために、この陸軍戸山学校にもフランス人が登用されていた。代表的な2人をあげよう。1人はエシュマン(André Echumann, 生没年不詳)である。明治5(1872)年第二次フランス軍事顧問団として日本に派遣され、4月11日付で日本陸軍省雇となり陸軍兵学寮勤務となった。明治8(1875)年に帰国するが、明治11(1878)年には「日本歩兵科の伝習を創業し、かつ陸軍戸山学校建設の功労」により、「日本国五等双旭日章」が贈られている。また本研究の課題に照らして最も重要な事績は明治7(1874)年に陸軍文庫から出されたわが国最初の『体操教範』を訳述(筆記は曾我準佑)していることである。また2人目はデュクロ(François Joseph Ducros, 生没年不詳)である。明治7(1874)年から10(1877)年まで陸軍戸山学校に教師として勤務した。明治16(1883)年には「日本国陸軍の体操術進歩の功労」により日本国六等单光旭日章が授与されている(大場, 1984)。

このような状況から上に述べた、陸軍戸山学校器械体操場の施設が『ラールス』の図に似ているのも容易に理解されるであろう。即ちフランス人教師が自国の施設設備をモデルに陸軍戸山学校器械体操場の施設を設計したという推測である。ただし、『ラールス』1912年版と陸軍戸山学校器械体操場が作られた1873年には39年間の隔たりがあるため、『ラールス』はあくまでも参考例である。

先に述べたように、『アンストリュクション』(1847年版)には、第XI図として「体操場配置図」が付されている(図5参照)。2大隊(200人)用は縦横とも100メートルの敷地に、1連鎖状走路(course dans les chaînes gymnastiques), 2砲弾・手榴弾・鉄棒投擲(boulets, grenades, barres de fer), 3高跳び器械(sautoirs), 4ミル(mils), 5水平円木(poutre horizontale), 6梁木(portique ou poutre tenant lieu de portique avec ses agrès), 7障碍場(fossé et perches à sauter), 8吊り下げ棒(barres à suspension), 9傾斜円木(poutres inclinées), 10競い合い場(luttes), 11石・杭サークル(cercles de pierres et de piquets), 12アモロス鉤(perches amorsiennes), 13木馬(cheval de voltige), 14城壁(mur pour les assauts), 15平行棒(barres parallèles fixes), 16梁木(portique ou poutre tenant lieu de portique avec ses agrès), 17基本演習場(mouvements élémentaires), 18棚(planches pour

les rétablissements), 19 走路 (courses), 20 溝付き板壁 (planches à rainures), 21 跳下台 (échelle sautoir et table), の 21 種 (31 個) の器械が配置されている。類似している点も多いが, オクトゴンや回旋鎧 (vindas ou pas de géant) が見られないなど, 『ラルース』の図とも, また陸軍戸山学校の錦絵図とも異なる部分がある。また, 木下 (1983, p. 7) によれば陸軍戸山学校の器械体操場のすぐ脇に, 床も板囲いもなかったものの, 間口 8 間 (14.4 メートル) 奥行き 30 間 (54 メートル) 位の大きさの「雨覆体操場」があったといわれる。これは配置図からすると『アンストリクション』のアンガー (hangar : 屋根のみの納屋) に相当するものと見られる。

(4) 開成学校の運動所

ところで明治 6(1873)年開成学校に運動所があり, 「行飛」, 「手摺」, 「矢倉」が設けられていたことは木下 (1971) によって既に明らかにされていたが, その折の器械体操場設計図が, 木村 (1996) によって発見された。それには高跳び器械, 木馬, 梁木, 固定平行棒 (手摺), 棚が含まれている。開成学校の体操指導をフランス人教師が担当していたという同氏の指摘を合わせて考えると, フランス体育の影響は軍隊ばかりでなく, 当初から一部学校体育へも見られたというべきだろう。

(5) 陸軍省『体操教範附図器械之部』(明治 17 年)

明治 17 (1884) 年 12 月陸軍省『体操教範附図器械之部』は, 平行動横木, 木馬, 手摺, 縄跳, 飛台, 棚, 鉄棒, 梁木, 附属器械 (階梯, 小弔鉄棒, 弔索鑲, 鼓木索, 索梯, 弔索, 独柱弔索, 弔棒, 円柱) であり, 内容的には対応する部分が多いものの, 教材体系や記述形式は 1847 年版『アンストリクション』とは一致しない。

(6) 陸軍省『体操教範器械之部』(明治 20 年)

明治 20 (1887) 年 11 月陸軍省『体操教範器械之部』は第 2 部器械体操として, 一般の規則, 鉄

棒, 棚, 木馬, 手摺, 高手摺, 跳縄, 跳台, 梁木, 梁木附属 (階梯, 鞆, 吊鑲, 吊棒, 吊索, 鼓索, 索梯, 十字梯, 鎧梯, 梁木器械競争), 綱引を示している。やはり, 内容的には対応する部分が多いものの, 教材体系や記述形式は 1847 年版『アンストリクション』とは一致しない。

これらのずれが『アンストリクション』の 1847 年版と 1860 年版, あるいはそれ以外の版の相違によるものか, あるいは原書の研究やそれまでの実践経験を踏まえて, 陸軍戸山学校が独自の改良を加えた結果なのか, あるいは『アンストリクション』以外の原書が用いられているのかは現在のところ不明である。

6. 兵式体操の導入とフランス体育

木下 (1982, pp. 61-72) に従えば, 明治 16 (1883) 年 12 月の徴兵令改正によって, 「(中等学校以上の) 官立学校の歩兵操練科卒業証書所持者」には実質的に徴兵猶予の特典が認められ, その代償として「官立学校で歩兵操練を行うこと」となった。確かにこれを契機に, 明治 16-17 (1883-1884) 年にかけて, 東京師範学校, 大阪中学校, 長崎師範学校, 福井師範学校のほか, 群馬, 岐阜, 神戸, 京都, 広島, 大阪, 新潟, 三重, 石川等の府県で, 歩兵操練実施に向けた動きが活発に見られた。

歩兵操練は『新式歩兵操典』(1878 年) に準拠するが, その範囲は「生兵之部第一部第二章」までであり, 「基本体操」「生兵」「小隊」である。すなわち, 「基本体操」としては, 明治 7 (1874) 年陸軍『体操教範』にみられる体操と, 「教練」として「生兵」「小隊」という初歩的な規律団体訓練が中心である。これに対して「兵式体操」は『歩兵操典』(1882 年)・『体操教範』(1874 年)・『野外演習軌典』(1882 年)等の陸軍典範や『普通体操隊列運動法』(1886 年)を参考にして, 生兵学, 中隊学, 行軍演習, 兵学大意, 測図までを演習することになっており, 実戦に欠かせない散兵戦闘教練までを含んだ実戦的な教材体系

である（木下, 1982, pp. 100–109）。またその目的にも違いが見られる。明治 15（1882）年 6 月大阪中学校教則に見られるように、歩兵操練の目的は、美容術、徒手運動、器械運動に「兼ねて歩兵操練の初歩を演習」（能勢, 1965）とあるように、当初は三育主義に基づいて健康な身体育成を専らとした普通体操の延長線上に置かれていたといえる。これに対して兵式体操の目的は「忠君愛国の精神涵養」「有形の修身科」、即ち徳育の手段としての性格が色濃く強調されている。即ち兵式体操とは、当初歩兵操練で示されていた教練（military drill）を実戦的に高度化するとともに、当時陸軍で採用されていた徒手・陸上・器械運動・野外活動などの教材を含んだ「体操」を付け加え、かつそれらの目的をきわめて精神性の強い忠君愛国的な徳目で強化、体系化した学校に於ける精神教育を兼ねた軍隊体育だったことになる（大久保, 1996）。

さて、こうした兵式体操が学校に導入される際にモデルとなったのはいうまでもなく、日本陸軍が採用・研究していた体育法であり、幕末フランス軍事顧問団の仏式伝習に端を発するフランス陸軍式の体育であった。明治 16–17（1883–1884）年以後、全国の中等学校を中心に、歩兵操練の採用が軍事訓練に必要な銃器整備のみならず、すぐに器械体操場の建設に結びついていったのはフランス陸軍体育、すなわち『アンストリュクシオン』中にそれらが盛り込まれていたからである。ちなみに明治 21（1888）年に建設された岩手県立中学校師範学校の器械体操場の器械は鉄棒、棚、梁木、手摺、平行木、ブランコ、木馬、階段（大久保, 1989）であり、その形状は明治 17（1884）年 12 月陸軍省『体操教範付図器械之部』に近い。

7. ま と め

慶応 3（1867）年に来日したフランス軍事顧問団は、フランス陸軍体育の指導書『アンストリュクシオン』をもたらした。林正十郎『木馬之書』はそのなかの木馬運動の翻訳であり、わが国近代体育研究の扉を開けた書物といえる。

この『アンストリュクシオン』をはじめとするフランス体育はその後主として陸軍で継続して研究され、また指導されていった。また南校など一部の学校でも活用されている。しかしながら、一般的に見れば、当時の初・中等学校では「体操」を実施する条件が整わず、事実上空白期が続く。そして明治 11（1878）年、体操伝習所が設立され、アメリカ人医師リーランド（George Adams Leland, 1850–1924）によってわが国に適した体育法として軽体操が選定された。ダイオルイス（Daio Luis, 生没年不詳）の考案した体操といわれる。体操伝習所卒業生の全国的な派出展開と共に、この普通体操は明治 10 年代後半には全国に普及していった。しかるに、明治 16（1883）–17（1884）年以後、ことに中等学校への歩兵操練・兵式体操の採用は、わが国の学校体育中に体操伝習所（文部省）が採用していた体操とは全く系譜の異なる陸軍省・フランス体育が展開されていく突破口を開いた形になった。体操伝習所によって我が国に適した体操として初めて採用された普通体操が保健養生を目的とし、教材としては徒手並びに若干の手具を用いた形式的な体操にとどまらざるを得なかったのに対し、兵式体操は一挙に器械体操や陸上運動、教練などの執銃訓練や野外活動など、体操科の教材と活動領域を著しく拡大する結果を生んだ。

しかしながら、フランス体育の導入が必然的に体操科の目的に徳育的要素を付け加えたということではない。フランス陸軍体育はあくまでも兵士の基礎訓練としての実用的なジムナスティーク（gymnastique）なのであり、これを「有形の修身科」としたのは、森有礼に代表される日本的な国家主義教育思想であって、明治 18（1885）年以後のことである。

このように、幕末フランス軍事顧問団と彼らをもたらした『アンストリュクシオン』は、直後からわが国陸軍体育の形成に結びついていたのであるが、明治 10 年代末に至る兵式体操の導入に伴って、わが国近代学校体育の形成にもくっきりとその影を残すこととなったのである。

附 記

幕末軍事顧問団をフランス側から見た研究として、クリスチャン・ポラック（2002）絹と光—知られざる日仏交流 100 年の歴史（江戸時代—1950 年代）、（Christian Polak; Soie et Lumières, L' âge d'or des échanges franco-japonais (des origines aux années 1950), アシエット婦人画報社：東京を追加しておきたい。

謝 辞

本研究に際して、フランス体育史研究家、清水重勇氏（神戸大学名誉教授）、和田浩一氏（神戸松蔭女子大）のご教示を得ている。記して感謝を申し上げたい。

注

注 1) 勝 海舟「陸軍歴史巻二十五」,「三兵伝習」(pp. 221-340) 中に示されている「建白和解者」(p. 277, 295, 296, 316) は全て「入江文郎訳」とされている。

注 2) 大場一義（1962）は『『仏蘭西輕歩兵程式』—蘭式から仏式—, 蘭学資料研究会報告 103 号 49 頁で、田辺良輔（1868）『新兵体術教練』に記されている「彼の原書」とは明治七年陸軍省『体操教範』の原書、すなわち『アンストリュクション』であり、シャノワンたちの持参した書も同様であったろうと述べて、すでに原書が『アンストリュクション』である可能性を強く示唆していた。

注 3) フランス国立図書館（Bibliothèque Nationale de France）には『アンストリュクション』は 1847 年版のほかに、1848, 1849 年版の所蔵が確認できるが、その検討は今後の課題である。

文 献

江戸城多聞櫓文書（1866）開成所教授職並之者横浜江江差遣候ニ付人足之儀奉願候書付（慶応三年卯正月、菅沼左近将監より周防守宛）明細短冊 8365, 内閣文庫蔵。

勝 海舟（1889）陸軍歴史, 勝部真長ほか編（1977）勝海舟全集 17, 勁書房草：東京。

木村吉次（1996）東京大学前史における体育に関する一

考察, 日本体育学会第 47 回大会発表資料, 千葉大学。木下秀明（1971）日本体育史研究序説, 不昧堂：東京, pp. 28-29。

木下秀明（1982）兵式体操から見た軍と教育, 杏林書院：東京。

木下秀明（1983）陸軍戸山学校の体育 1, オリンピック, 21: 6-9。

小西四郎（監修）（1990）江戸幕臣人名辞典, 新人物往来社：東京, p. 247。

Larousse, P. (1912) *Illustré: Nouveau Dictionnaire Encyclopédique, Petit Larousse*: Paris, p. 453.

Ministère de la Guerre (1847) *Instruction pour l'enseignement de la gymnastique dans les corps de troupes et les établissements militaires*, librairie militaire de J. Dumaine: Paris, p. 200, 及び巻末付図。

能勢修一（1965）明治体育史の研究, 逍遙書院：東京, p. 154。

大場一義（1982）田辺良著作小学必携体操図解（明治七年）解説, 近代体育文献集成第一期解説, 日本図書センター：東京, pp. 33-34。

大場一義（1984）日本陸軍体育史上に輝くフランス軍事教官団, 筑波大学体育史研究室研究発表会資料（未公刊）。

大久保英哲（1989）兵式体操の地方における受容過程：岩手県の 2 つの県立学校的事例から, 金沢大学教育学部紀要教育科学編, 38: 93-110。

大久保英哲（1993）近代日本体育史における林正十郎「木馬之書」（推定 1867 年）の意義, 体育学研究, 38(3): 157-173。

大久保英哲（1995）近代日本体育の形成におけるフランス体育の影響（その 1）, 平成 5・6 年度科学研究費補助金成果報告書, pp. 1-39。

大久保英哲（1996）地方から見た近代体育史上の歩兵操練・兵式体操, 成田十次郎先生退官記念論文集, 体育・スポーツ史研究の現状と課題, 不昧堂：東京, pp. 369-387。

大久保英哲（1997）近代日本体育の形成におけるフランス体育の影響（その 2）, 金沢大学教育学部紀要, 教育科学編, 46: 59-78。

陸軍省（1874）エシュマン口述長坂昭徳筆述, 体操教範, 陸軍文庫。

篠原 宏（1983）陸軍創設史—フランス軍事顧問団の影—, リプロボート：東京。

鈴木 明（1984）ホトガラヒー探検第 12 回, 写楽,

12(5): 883–887.

武市銀治郎（1999）富国強馬—ウマから見た近代日本—，講談社：東京.

田辺良輔（1868）新兵体術教練，近代体育文献集成第15巻（1982），日本図書センター：東京.

館山 一（1934）仏式伝習口説節，歴史公論，3(10):

288–292.

富田 仁（1988）仏学始祖村上英俊の門人たち(1)，蕃書調所（開成所）のフランス学，日本大学法学部桜文論叢，12: 340–351.

（平成20年1月23日受付）
（平成20年12月11日受理）